

【論文要旨】

武家服飾変遷史序説―鎌倉時代から室町時代へ―

比較社会文化学専攻 山岸 裕美子

服飾はそれを装うことによつて、周囲に対し心情・身位・美意識を伝え、さらに力関係をもあらわす。それは服飾が自己表現の場だからである。この観点に基づき、北条氏執権時代から室町時代盛期（四代（六代將軍時代）の服飾から武家の意識を探った。それに際しては、盤領仕立ての公家系服飾である狩衣・布衣、水干と、垂領仕立ての直垂について着用の諸相を検討するとともに、武家の装いの背景にある心意や意図を明らかにした。これを明確にすることにより、服飾表現が一つの記号となつて、中世の史料を読み解く際の一助となると考えたためである。

服飾の格付けは、狩衣↓布衣↓水干↓直垂の順であるが、単に格付けに従つて着用するのではなく、武家はそれぞれの思惑により使い分けていたと思われるため、これらを盤領仕立ての公家系服飾（狩衣・布衣、水干）と、垂領仕立ての武家服飾である直垂に分類し、各章で論じた。

第一章においては狩衣・布衣を扱った。狩衣と布衣は、全く同じ形態をもつ衣服である。武士は前代においては貴族の侍として警固にあたる際、武器を帯び布衣を用いていたが、公家をしのぐ実力をもつようになると、前代の武に携わる者としての着用のしかたを捨て去り、

武事に対する文事における礼装とした。これは新たな服飾文化の誕生といえる。また、狩衣と布衣の違いは故実書などで様々に唱えられているが、北条氏執権時代においては「鎌倉幕府追加法」の規定により、区別して用いられていた。つまり、有文の狩衣は諸大夫である五位以上の着用とし、無文の布衣はそれ以外の者の着用としたのである。このような規定は、幕府上層部の実力者たちが自らの権威付けを行うための方途であったと考えられる。

第二章では水干について、公家の着用のしかたと対比することにより、武家の意識を明確にした。公家は相変わらず遊興の服や軽装として着用していたが、武家は水干を射芸のための装束とした。さらに武威を誇示するために、幕府重職者たちが將軍上洛に際しての供奉装束として弓箭を帯して装うなど、公家社会に対してあたかも武を銜うが如き用い方を確立させた。

第三章では、当時、武家服飾としての確立をみた直垂の装いの背景について検討した。直垂はもともと庶民の日常着から発した衣服であり、出自を低い身分にもつ武士に馴染みの深い衣服であった。彼らは、日常着から出仕・儀礼にいたるまでこの直垂を用いていたが、特に供奉行列において將軍を直近で護る「直垂帯剣」の役が用意され、この任に当たる武士は武勇に長けているだけではなく、將軍御所内諸番役を勤め、公家將軍の要請に応えられるだけの文化的素養を兼ね備える者たちであった。彼らは行列においては衆目を集める武家の花形であり、そこで着用したのが直垂だったことから、「直垂帯剣」の装いは、

武家の「あるべき姿」であったことがわかる。

また、当時男性は必ず烏帽子を被ったが、直垂着用の際には立烏帽子と折烏帽子とがあった。立烏帽子は威儀を正す際に用いられ、特に被っている折烏帽子を引き立てた場合には、恭順や忠誠の意をあらわした。また折烏帽子は戦場で被られたことから推して、武士の象徴ともなっていた。そのため直垂折烏帽子姿は、武士の標徴ともいえる。さらに親王将軍に対し武家は、独自の儀式において直垂着用を求めた。武門の棟梁であるからには武家服飾の直垂を着用すべきであるとし、また、武家社会の代表であることを直垂姿をして確認する意図があったと考えられる。

第四章では、これまでで得た知見に基づき、室町時代の儀式において役人が装った白直垂の意味について考察した。その際、白という色が含む様々な意味を探るために時代を縦断する形で、前代からの着用の諸相を検討した。その結果、白直垂は一步引き下がって主人や目上の者を引き立てる意味があることがわかった。とはいえ、この装束で役目を果たす武士は決して身分が低いわけではなく、官途栄進の途次にある将来有望な武士たちであった。

第五章においては、直垂をとおして室町時代盛期における公武関係について検討した。直垂は卑官である武士が着用してきた衣服であり、前代には武家が自身の存在を誇示するために用いた衣服でもある。にもかかわらず、この当時は高位の公家が着用するようになったのである。それは室町殿（将軍）の家礼となった多数の公家たちであり、公

卿である伝奏をつとめる者も含まれていた。彼らは権力と武力をもつた室殿に臣従するにあたり直垂を装い、また室町殿も、自身の権威を示すために、文化行事において公家たちに直垂の装いをさせた。この現象は、まさに服飾史におけるコペルニクスの転回といえるであろう。

いずれにせよ、服飾の変遷をたどると、武家は装いをとおして、公武関係においては自己顕示を行い、武家社会内部においては主従関係や秩序の維持を実現させようとしていたことがわかる。そしてさらに、武家独自の美意識に基づく服飾文化を築いたといえるのである。